常照

52
2004

佛教大学図書館報

目次

巻頭言　館長一年 (1)
動き出した情報リテラシー講習会 6
『佛教大学浄土宗文献室所蔵逐次刊行物目録』 5
「電子展示」紹介『都百景』 4
平成14年度諸統計 2
新収資料紹介『十二月あそひ』 1

第十五阿氏多尊者。雙手抱膝。而開口仰視。菌才畢。露脱去。數枚。
抱膝何。勞頭顱岩覓。縫開口。縫舌相可描。以眼
說法。聞合無常。明時代謝。奚累此光。

●佛教大学図書館所蔵『十六羅漢圖贊輯録』より

巻頭言

館長１年
―内と外の接点にたって―

図書館長　池見　澄隆

とかく１年生は張り切り過ぎる。そのせいか、このところ、いささか疲れ気味である。

昨春、館内での就任あいさつのとき、私は開口一番、利用者の視点を忘れぬ館長でありたいと言い放った。きのうまでの利用者の立場を放棄して、ただちに管理者に鞍がえすることを潔しとしなかったし、つねに現役の研究者、ひいては現役の利用者でありつづけたいというねがいがあったからである。

あるヴェテラン館員によれば、ライブラリアンの適性として「本が好き」だけでは不充分であって「人が好き」でもあることが求められるという。なるほど要望に応じた本を提供しえたとき、満足げに本を抱いて帰る利用者のうしろ姿に、館員もまた充ち足りた気分を味わうのであろう。うるわしい光景である。

ところが本の扱いをめぐって管理者と利用者のあいだには、意識のうえでさまざまな断層や齟齬が基本的に伏在していることもたしかである。たとえば分類ないし排架。これらの仕事は、いわば形式合理主義に則っている。当館は原則、NDCを採用しているが、個人の手づくりの成果というべき著作いわば分身が、一定の基準によって分類されると知ったとき、著者は一瞬、ある種の戦慄を覚えるにちがいない。分類を予想して本を書く人はいないからである。しかしまた現今の分類体系のなかで自著が第三者の手によってどこに位置づけられるのか興味がわくといった面もあろう。ことに学際研究のように複数の分野にまたがるものとか、新しい先端領域の研究書などは、分類する側も骨が折れるはずである。これは書店の、売り棚への並べ方とも通じる話であって、かつて丸山真男は、自分たちのような“思想史”の分野の本は、いつもいい加減なところに置かれると嘆いたものである。

利用者ー研究者や学生諸君は、私的には実質合理主義にたつ。かりに全集ものの場合に例をとれば、個人の書斎や研究室、下宿の本棚には自分にとって利用頻度の高いものを抜き出して手元に据え置くとか、ときには購入の時点で自分に必要な巻のみを選別することなどは日常茶飯である。

ところが図書館ではいうまでもなく全巻を一括収集し、左から右へ、上から下へと巻次を追って排架し、「万人」の接架・利用の便宜を図ることを至上とする。ここには“すべての本をだれにでも”という図書館員の美しい理想が前提としてある。

しかし利用の実際を考えれば、特定の利用者個々の守備範囲は狭くかつ固定的である。ことに大学図書館の専門書ともなれば、むしろ“この本はこの人に、あの本はあの人に”といった極論さえ主張されかねない。

かくして、管理者・利用者双方のあいだには、うるわしい共生のみならず、きびしいギャップがついてまわることにもなる。両者のはざまに立つ館長の気の休まるときは、したがって１日たりとも無い。

（文学部教授・いけみ　ちょうりゅう）

動き出した情報リテラシー講習会

―期待される基礎ゼミ1コマ講習―

竹村　心

はじめに

図書館は今年度から学生諸君に「情報を使う力」を身につけてもらうために、新たに『情報リテラシー講習会』と『情報リテラシー教育支援講習』の2本立て講習を開始した。特に、授業と連携した『情報リテラシー教育支援講習』（基礎ゼミ1コマ講習）後、受講した学生が文献検索に力を発揮し、他大学への文献複写も含めて文献収集に一段と変化がみられるようになった。

あらためて、図書館が行なう「情報リテラシー講習」と「情報リテラシー教育支援講習」の必要性と、課題が明らかになった。

始まった図書館主催の「情報リテラシー講習会」

2003年5月6日から30日にかけて、図書館は「平成15年度情報リテラシー講習会〔春学期〕」を開いた。講習は（1）OPACとNACSIS-Webcat、（2）「雑誌記事索引」講習、（3）「新聞記事検索」講習、（4）「図書館利用ガイダンス」の４課目、延べ149名の受講者があった。また、10月１日から１７日にかけては、「平成15年度情報リテラシー講習会〔秋学期〕」を開いた。講習は（1）図書館ツアー（2）OPAC（3）Webcat（4）「雑誌記事索引」検索（5）新聞記事検索（6）ジャパンナレッジの６課目、延べ13名の受講者があった。さらに、７月28日から８月６日かけて、「平成15年度通信生のための情報リテラシー講習会」を４課目で講習を行い、延べ、101名の受講者を迎えた。「情報リテラシー講習会」には総勢263名の受講者を迎えたことになる。

図書館が行なう「情報リテラシー」講習会はなぜ必要か。

情報化社会とは情報量が多いというだけではなく、メディアが多様化し、内容も多種多様化している社会である。人々には多くの情報が与えられているようでありながら、それは情報を提供したい側が流すものであり、従って、主体的に必要とする情報を探し出す能力が現代人には不可欠である。また、多量であることは、それだけ自分が必要とする情報の入手を困難にしている。メディアの多様化と変化の早さはそれを利用する際に、専門家である図書館員の指導と援助が必要とする状況になっている。

一方、国際化とは、多文化、多価値の交錯する社会である。各種イデオロギー、宗教的信条、生活様式と習慣、価値観は多様化し、お互いに共存を求めながらも激しく対立しているのが現代の社会の特徴である。思想信条の自由や表現の自由が保障されているということは、発信される情報はきわめて恣意的であることが多いことでもある。一つの情報はある立場、ある時代、ある特性を持った人が提示しているものであるという認識が必要である。情報の質にはばらつきもあり、その評価の基準も多元化しており、

発信されない情報や無視される情報もある中で、公平に収集しようとしている図書館の存在は貴重であり、図書館の利用方法を知ることは情報リテラシーの重要な要素である。

「情報を使う力」が身に付く『基礎ゼミ』での1コマ講習

(1) 本学における情報リテラシー教育の現況

佛教大学における情報リテラシー教育の現況は、通学生の場合、共通科目の中の区分「情報」に、「情報機器の操作」(第1学年次履修)「通信とデータベース」「プログラミング」(第２回学年次以上履修可能）の授業（すべて２単位）が開講されていることに示されている。

また、通信生については、総合科目の内、教養科目として情報処理入門（２単位）をテキストで履修、学際科目として、「調査と統計」「情報と社会」をスクーリングとテストで履修することになっている。

(2) 本学における情報リテラシーの諸相

教育学部黒田助教授のホームページによれば、２月、２回生の「プレゼミ」で「基礎的なコンピュータの操作について習熟する。」として、３回生が２回生を教える方式(STS)で情報リテラシー教育を補っている。

また、通信生の場合、図書館でのOPAC及びデータベースの検索では戸惑う学生が少なくない。

(3) 情報リテラシー教育を支援する図書館による『基礎ゼミ』1コマ講習

今年度、図書館は本学が行なっている情報リテラシー教育（Education）と図書館の利用者支援の延長線上にある情報リテラシー（Instruction）とを区別し、それぞれの補完関係を大切にして、図書館主催の「情報リテラシー講習会」と授業と連携した情報リテラシー教育を支援する「情報リテラシー教育支援講習」(『基礎ゼミ』1コマ講習)の２本立ての情報リテラシー事業を展開した。図書館収書委員の先生方を中心に７つのゼミの学生を対象に、『学術情報をＧＥＴする―雑誌論文検索からOPAC、Webcatへ』をパワーポイントを使って、30分の講義と60分の実習を行なった。総勢194名の学生が受講したことになる。

受講後、これらの学生は情報を使う力を身につけて、レポートを作成する際、情報検索に飛躍的な力を発揮して、他大学への文献複写の依頼も含めて、文献収集に大きな変化がみられる。

今後、図書館としては基礎ゼミを担当されておられる教員の方々と協力して、新たな教材開発も含めて、『基礎ゼミ』１コマ講習を広く実施する予定である。

（図書館専門員・たけむら まこと）

＜輪蔵だより＞

◆平成15年4月より利用者サービスの向上のため開館時間の延長、ホームページのリニューアルを行い、館内各階のＯＰＡＣ横に外部情報検索用端末（サンサーラ）を設置して、他機関の所蔵情報なども検索できるようにした。また、情報リテラシー講習会を開催し、必要な情報を効果的に探索して使用する学習活動の支援の強化を行った。今後も利用者の視点にたったサービスの向上に努めていきたい。

『佛教大学浄土宗文献室所蔵逐次刊行物目録』

藤堂　祐亨

浄土宗文献室は、1972年4月に、旧図書館開館と時を同じくして浄土宗文献センターとして開所した。当時散逸するに任せられていた近代浄土宗の教化資料全般の蒐集を目的とする専門資料館として創設され、その後2000年4月図書館に併合され図書館浄土宗文献室となった。

創設より30年間にわたって蒐集してきた資料は、おおよそ50万点を数えるに至った。蒐集方法は、専ら宗内寺院や関係機関からの寄贈に頼った。収蔵目録について言えば、資料全体を一覧できる目録は作成されなかった。ただ資料蒐集用に作製されたものや、図書館発行の逐次刊行物目録の中に主要な資料が収録されているに過ぎなかった。

当室の長年にわたる蒐集活動により、近代仏教の歴史を紐解く上での必須の資料、特に近代浄土宗史の資料が数多く体系的に蒐集・整理されるに至った。その中でも『浄土教報』・『浄土宗宗報』の2誌が特筆される。それを紹介しよう。

『浄土教報』は、1889(明治22)年に創刊された。内容は、浄土宗の公示や教化活動を中心に、法話、時事隅評、教学叢談、文藻などの見出しのもとに学術から布教まで幅広い内容を盛り込んでいる。その後『浄土宗宗報』が創刊されるに及んで、主に浄土宗教団の雑誌として宗門の啓発に貢献してきた。所蔵は、誌名変遷はあるものの創刊号より2472号で終刊を迎えている。

一方『浄土宗宗報』は、浄土宗の教令・告示・人事異動、宗議会議事録、その他の消息を宗内寺院に伝達する目的で1917（大正7）年に創刊された。一時期浄土宗分裂の時期もあったが、2003年末現在、1007号を数え継続して刊行されている。また分裂時の宗報『浄土宗本派宗報』も、創刊号より浄土宗合併時の161号まで所蔵している。

今回の『目録』の体裁は、B5版、119頁である。2002年12月末日現在所蔵のタイトル数は、およそ2000を数えている。分類は、寺報・機関紙・雑誌・新聞・伝道はがきの5分野で、それぞれ浄土宗内・浄土宗外に区分している。加えて口絵は主要な資料を写真で掲載し、索引はタイトルの50音順で収録されている。

また、冊子体目録のほかに、昨年8月当室のホームページ開設に伴い、『目録』をPDFファイルに変換して、目録を公開している。

当室の利用方法については、学内・学外の方は、身分を証明できるもの(学生証)が必要です。利用は、閲覧・複写のみです。学外の方は、事前に電話などで所蔵確認をしてからご利用下さい。

最後に本目録ご希望の方は、図書館1階カウンターで申し込んで下さい。

（浄土宗文献室・とうどう　ゆうこう）

http://www.bukkyo-u.ac.jp/lib/jobun/mokuroku.html

◆「電子展示」紹介

都百景

幕末の京都の名所を描いた『都名所百景』(佛教大学図書館所蔵)は、江戸時代後期(1860年ごろ)に東居ら5人の絵師が手がけ、大阪の版元石和により刊行された彩色木版画です。現在も知られる信仰や観光の名所など、京都御所から泉涌寺まで全100景。写真家中川邦昭氏が約20年前に大阪の古書店で購入され、2002年12月本学にご寄贈くださいました。

15. 知恩院門前

ホームページでは、【地図で見る都百景】と題して都百景の分布を地図であらわし、それぞれの絵図には、中川邦昭氏の解説と共に現在の写真を添えてあります。現在「御所」から「南禅寺三門深雪」までの22景をホームページ上に掲載し、順次更新する予定です。

※ 佛教大学図書館ホームページ（http://www.bukkyo-u.ac.jp/lib/）より「電子展示」メニューをクリックして下さい。

平成14年度　諸統計

蔵書数（平成14年5月1日現在）

	内国書	外国書	合　計
図書	622,057冊	153,378冊	775,435冊
雑誌	5,800種	1,970種	7,770種

資料区分別受入冊数

資料区分		和書	中国書	洋書	その他	総計
図書（単行本）		14,216	4,248	1,429	0	19,893
逐次刊行物		1,217	68	148	0	1,433
マイクロ資料・その他	マイクロ資料	628	0	0	0	628
	地図資料	53	5	1	0	59
	楽譜資料	15	0	0	0	15
	録音資料	46	0	0	0	46
	映像資料	182	0	0	0	182
	静止画像	21	0	0	0	21
	機械可読ファイル	266	31	0	0	297
	博物資料	1	0	0	0	1
	複製資料	10	1	0	0	11
	その他	6	0	0	4	10
	小計	1,228	37	1	4	1,270
合計		16,661	4,353	1,578	4	22,596

注：図書（単行本）は、大学資産として受け入れられたものすべての数である。通常整理と簡易整理（学術研究助成分など）に分けられる。逐次刊行物（雑誌）は、製本されたものの登録数である。

主題別整理冊数（単行本）

主題別	和書	中国書	洋書	計
0 類 総記	1,310	75	15	1,400
1 類 哲学	1,773	69	285	2,127
(14) 心理学	(168)	(0)	(70)	(238)
(18) 仏教	(1,046)	(45)	(158)	(1,249)
2 類 歴史	1,689	70	86	1,845
(21) 日本史	(1,047)	(0)	(25)	(1,072)
(22) 東洋史	(185)	(40)	(24)	(249)
3 類 社会科学	3,566	48	258	3,872
(36) 社会学	(607)	(2)	(106)	(715)
(369) 社会福祉	(548)	(1)	(11)	(560)
(37) 教育	(908)	(1)	(65)	(974)
4 類 自然科学	318	0	43	361
(49) 医学	(212)	(0)	(24)	(236)
5 類 技術	178	3	3	184
6 類 産業	139	3	3	145
7 類 芸術	975	28	20	1,023
8 類 言語	218	28	77	323
(81) 日本語	(92)	(6)	(1)	(99)
(82) 中国語	(45)	(22)	(23)	(90)
(83) 英語	(43)	(0)	(13)	(56)
9 類 文学	1,323	101	313	1,737
(91) 日本文学	(1,069)	(0)	(1)	(1,070)
(92) 中国文学	(87)	(99)	(8)	(194)
(93) 英米文学	(82)	(0)	(240)	(322)
総計	11,489	425	1,103	13,017

注：平成14年度に大学で受入登録された単行書の通常整理（データ入力済）分である。
（　）内は内数である。

主題別貸出冊数

利用者別 / 主題区分	通学				通信				教職員		その他		総計	
	学部		大学院		学部		大学院							
	和書	洋書	和書	洋書	和書	洋書	和書	洋書	和書	洋書	和書	洋書	和書	洋書
0類 総記	131	0	27	0	52	0	6	0	7	0	15	0	238	0
1類 哲学	8,556	39	2,887	158	3,031	6	621	16	742	36	1,050	52	16,887	307
2類 歴史	5,849	3	1,352	4	1,500	1	172	2	465	1	361	8	9,699	19
3類 社会科学	18,114	5	2,087	51	9,100	9	345	7	691	75	687	20	31,024	167
4類 自然科学	1,794	0	231	2	722	0	27	0	56	1	79	1	2,909	4
5類 技術	1,054	0	111	0	114	0	2	0	21	0	46	2	1,348	2
6類 産業	558	0	151	0	94	0	7	0	35	0	25	1	870	1
7類 芸術	2,610	1	201	0	376	0	45	0	106	8	185	0	3,523	9
8類 言語	4,786	5	709	10	1,190	16	173	5	396	16	417	11	7,671	63
9類 文学	5,475	38	815	52	1,967	48	309	51	224	27	336	23	9,126	239
分類なし	0	0	6	0	4	1	0	0	12	0	0	0	22	1
計	48,927	91	8,577	277	18,150	81	1,707	81	2,755	164	3,201	118	83,317	812
中国書	17		110		20		3		23		21		194	
国書	1		6		0		0		0		0		7	
佛書	3		2		0		0		9		0		14	
宗書	6		2		0		0		19		11		38	
文庫	8		12		0		0		65		0		85	
その他	3		7		1		0		14		1		26	
総計	49,056		8,993		18,252		1,791		3,049		3,352		84,493	

注：利用者別の「その他」欄には、研究生・研究員・卒業生・事務用利用等を含む。

◆新収資料紹介

『十二月あそひ』

古川　千佳

「弥生の空には咲き残る花もなし、うちつづく春雨に散り過ぐる枝々、青葉混じりの花の色、人の心をぞ迷わし悩ますものなる名所多き花の匂い…」と『十二月あそび』三月の詞書は始まっています。

この「弥生」は陰暦の三月、閏月も入る今年の三月一日は太陽暦では月も半ばをすぎた4月19日となります。梅は正月、桜も二月、三月にはすでに咲き残る花はなく、早くも梅雨を思わせる空模様ということでしょう。

さてこの絵巻には正月から極月（十二月）にいたるまで内裏、京の町々を中心に伝わる年中行事や遊びの数々、季節の自然などが月ごとに描かれ、その様子が絵と詞、交互に書き連ねられています。京都に住まうものにはなじみの深い地名や、「人の心を迷わし悩ます」という花の名所も多く登場します。いまに伝承される行事や風物もありますが、この絵巻が製作されたころ（江戸中期ごろか）と現在とでは違ったかたちで残っているものなども多く、比較しながら楽しむこともできます。

月づきに拾い上げると、

【正月】

正月のしつらえ（門松、注連飾り、蓬莱山飾り）、年始挨拶、恵比寿舞、鳥追い（ささら）、恵比寿かき（弓）、年玉、扇売り、玉とばし、七草、どんど？、鏡開き

【二月】

梅の花、うば桜、八重紅梅、春霞、涅槃会、涅槃相

【三月】

春雨、青葉、花の名所（吉野、初瀬）、嵯峨野（大念仏、御身拭い）、高野大師の御影供、東寺、庭鳥合わせ

【四月】

卯の花、花橘、郭公（死出田長）、山吹、灌佛、若葉、藤の花（北の藤波、大谷、白藤、野田の藤棚）、酒宴

【五月】

端午の節句（あやめ葺き、幟、兜、茅巻）、賀茂競馬、深草神事、石打、印地

【六月】

蚊遣り火、夕顔、祇園祭、四条の町、神の御輿、犬神人

【七月】
乞巧奠（天の川、牽牛織女、鵲の紅葉の橋、五色の糸）、六道詣り、精霊迎え、百味の供物、施餓鬼供養、燈篭、盆踊り
【八月】
越路の雁、萩の下葉、早稲田、虫の声々、月（十五夜、桂、洞庭湖、更科、姨捨、二見が浦、清見が関、広沢の池、須磨明石）
【九月】
野分、すすき、萩の葉、蝉の抜殻、草の間垣の露、重陽（菊慈童、仙人、延年草、菊酒）
【十月】
出雲の神有月、笹船、北時雨、紅葉（龍田明神、蜀江、稲荷山、高雄、清滝）、土器投げ
【十一月】
霜柱、庭火（天照大神、スサノオ、天の岩戸、八咫の鏡、思兼、天の香久山、神楽舞）
【十二月】
師走の月夜、正月準備（すす払い、門松、ゆづり葉、注連飾り、鏡餅）、節季候、大晦の夜（たいまつ、掛金とり、若水、屠蘇白散）

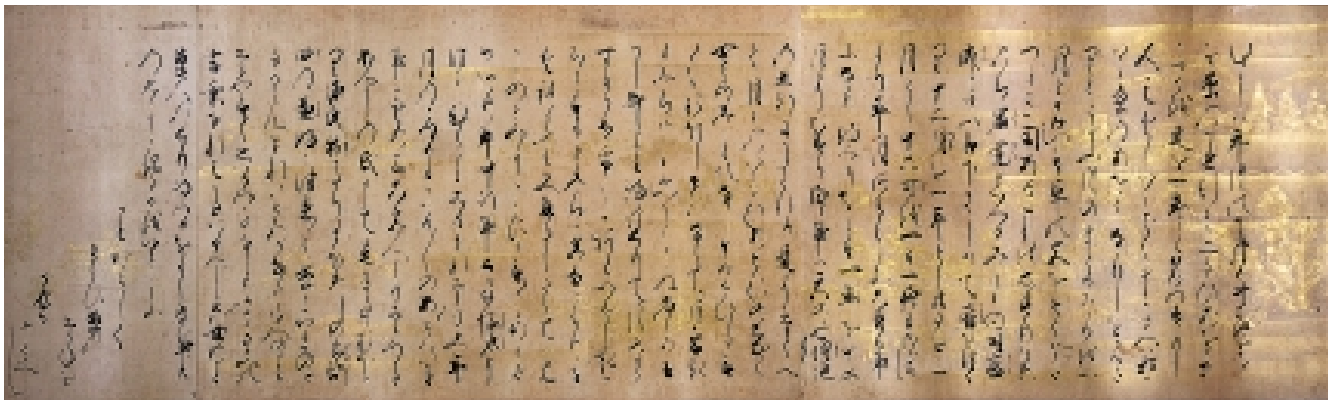
と楽しい行事やあそび、植物などが登場しますが、美しく楽しいひとときを思いおこさせるだけでなく、いくつかの貴重な時代風物を映しており、近世のみならず近現代にまで示唆に富むさまざまな要素を含んだ資料としてこれからの研究が待たれるものです。ここにひとまず写真にて書誌情報・詞書釈文とともにご紹介いたしましょう。

（図書館専門員・ふるかわ ちか）

【十二月あそひ】書誌

紺地に金糸織模様のある布表紙、濃紫の平紐を巻き、見返しには金の箔を置く。厚手鳥子紙に金の下絵を施した本紙は裏地にも雲母を引き、金の切箔を散らした豪華な絵巻である。本紙は狭い部分で幅七・七、広いところでは九五センチをこえる紙を継いでいる。内題はなく、標題は書題簽によるものである。各月の絵と詞は上巻では絵が、下巻では詞書がさきに位置している。

標　題：十二月あそひ
箱蓋題：十二月遊繪
箱側題：十二ヶ月絵巻（後補）
数　量：巻子上下二軸
巻　紐：濃紫平紐
題　簽：金砂子散し鳥子紙
表　紙：紺地に金糸織文様布表紙
見返し：表地折返しに金箔置紙
本　紙：金彩草花下絵鳥子紙に彩色画および墨書詞書
裏　地：雲母引金切箔散し鳥子紙
紙　高：約三三・三㎝
軸　高：約三四・九㎝
軸　先：象牙
詞　書：漢字交じり平仮名文（一部振仮名付）



【十二月あそひ】詞書釈文

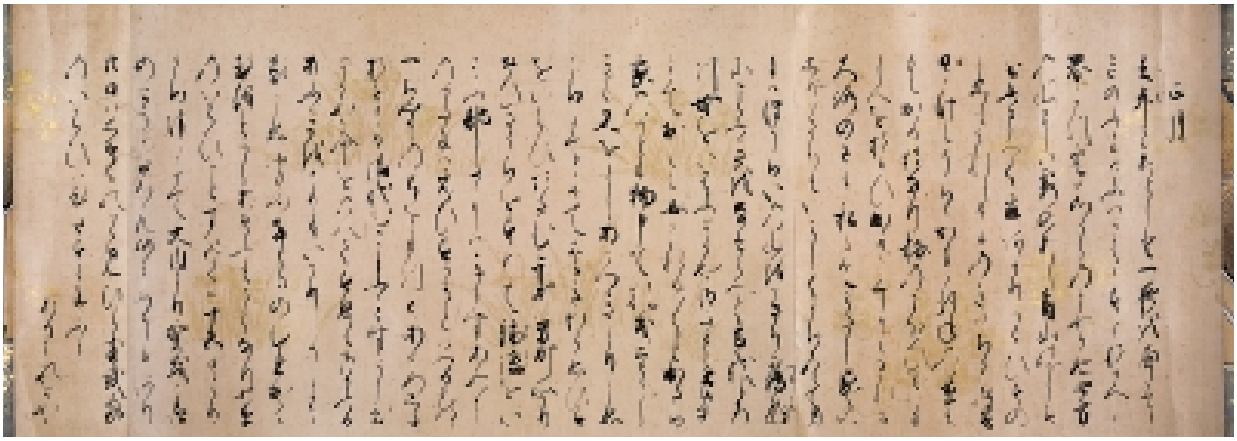
【上巻】

むかしは年月のうつる時節をしらず草のかれ行て二たひあをくさかふるを是を一年と名つけもし人其としいくばくぞととへは我はいく草のあをくなりしを見たりとこたふ月のまとかなるを一月と名つけ草の色をそく生たつとき閏あることをしれり其のち唐尭といへるみかどの時容成といふ臣下はしめて暦をつくり十二月を一年とし卅日を一月とし十二時を一日一夜にさだめしより年月あきらかにしれる事になり侍へりをよそ一年を十二月にわけらるゝ事は天の七曜地の五行にかたとれり是にたくへて月々のいはひあそひのしな〳〵世々のみかとのなしそめ給ひしかす〳〵おほしそれならて月雪花もみちはこと更うとからぬなかめそかし哥よみ詩つくりて月はくもらすもかな雪にはあとつけし花はちらすももみちは色なかはりそとねかふも又やさしさらてはみかとのまつりことにかす〳〵のさためあり年中行事公事根源につまひらかにしるされたり又年月のうつるにかはる〳〵のあそひ有事は雲の上大宮人よりしたつかたあやしの民まて是有事おほかり源氏物かたりまほろしの巻吉田の兼好かつれ〳〵草にかきのせたるらんそれはをろかならん人のよみたやすくしるへき事もふかき文の言葉なれはかたかるへし只世のこと草人のしり侍へるをかしき事共のゑにかきたるをいさゝかに

ことかきして

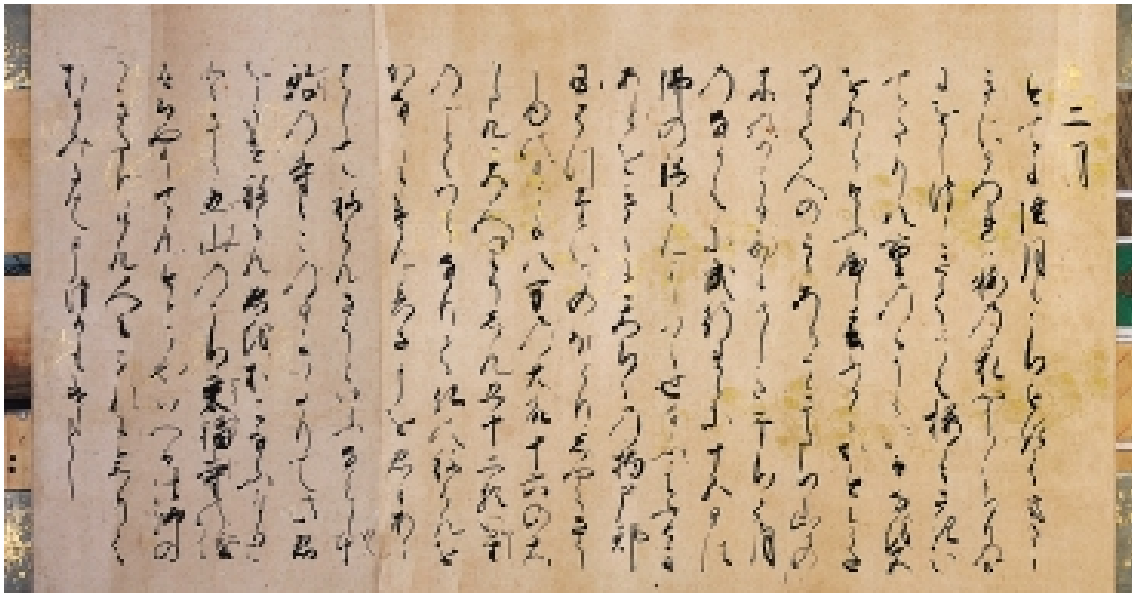
わらひ草の
たねを
うゆる
なるへし

(17)頁に拡大図あり



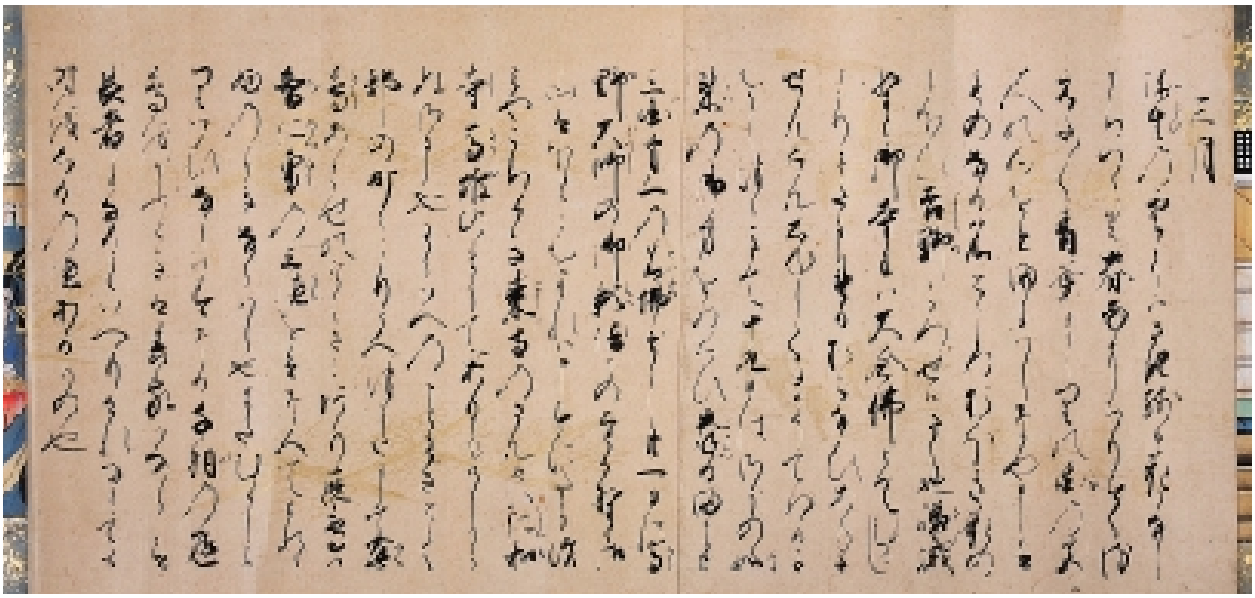
正月

去年(こぞ)とことしと一夜をへたてゝ
きのふにけふはかはらすとおもへと
春たつ空は心からのとやか也四方
の山には霞のあし青山のかしら
をふまへて立あかりうくひすの
こゑもうれしけにのきはちかく聞ゆ
日かけもうらゝかにかきねの草も
もえ出る程なり梅のにほひもいに
しへをおもひ出るよすかとなれる
大路のさま松たてわたし家々の
しめかさりもいみしくうちみえて内
にはほうらいの山をかさり鶴亀(つるかめ)
にことふきをなそらへて千代よろ
つ世をいはふとかやさたまれる事
とておとこ女われも〳〵と出たち
家のかとに物申て礼義たゝし
きも又をかしあかつきよりこゑ
うちたてゝめてたきわかゑひす
をいはひおさむ千町万町のとり
おひさゝらをすりて福徳(ふくとく)をい
はふ都かたにはきかすあつま
のかたにはえひすかきといへるものゝ
一ちやうの弓をもつてあまつした
おさまる御代をことふきすとし玉
とかや命をのへてすゑもさかふる
あふきをうるもいかめしうよはゝ
るこゑ聞ゆ子とものむれ出て
玉をとはしあそふもさらなり七草
のいはひことすきては十五日より
うちつゝきて大内より賀茂かはか
のとうとおほんのまつりもあり
廿日はくそくのかゝみひらき武家
のいはひはひたすらけふに
あるものをや



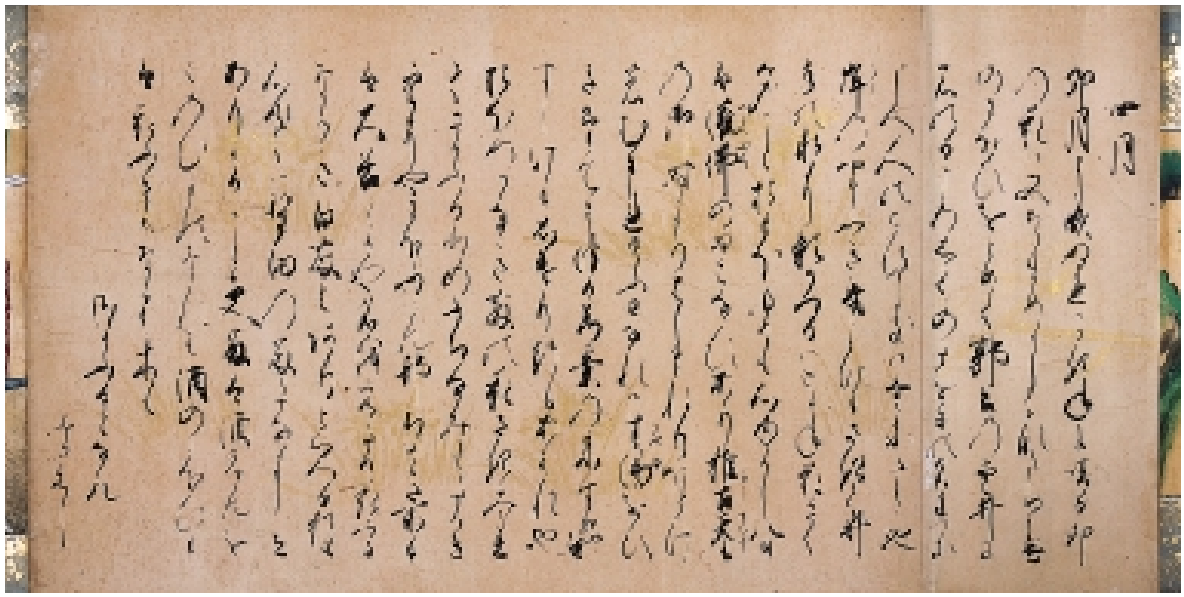
二月

すてに睦月もうちすきてきさら
きにうつれは梅の花やう〳〵ちりぬる
にをしつゝきてうは櫻もさきい
てたり八重のこうはいはなを色
をあらそふやゝ春ふかくかすみわた
りて人のこゝろもうきたち山ゝの
木のめはるへにけしきたちて月
のなかはに成行まゝに十五日は
佛のねはんにいらせ給ふ其ふるき
あとをきくに天ちくの狗邪那
國はつたいかのほとりしやらさう
しゆのもとに八万の大衆十六の大
からん天人りうしん五十二るい星
のごとくつらなりて仏のねはんを
かなしみけん其さまをゑにあら
はしてねはんさうといふならし本
朝の寺々この日にいたりて此ゑ
をかけねはんゑをおこなふなるこ
とさら五山のうち東福寺の繪
はちやうてんすとかやいへる法師の
かきたりけん人ゝこれに参りて
おかみたてまつるもけうとし



三月

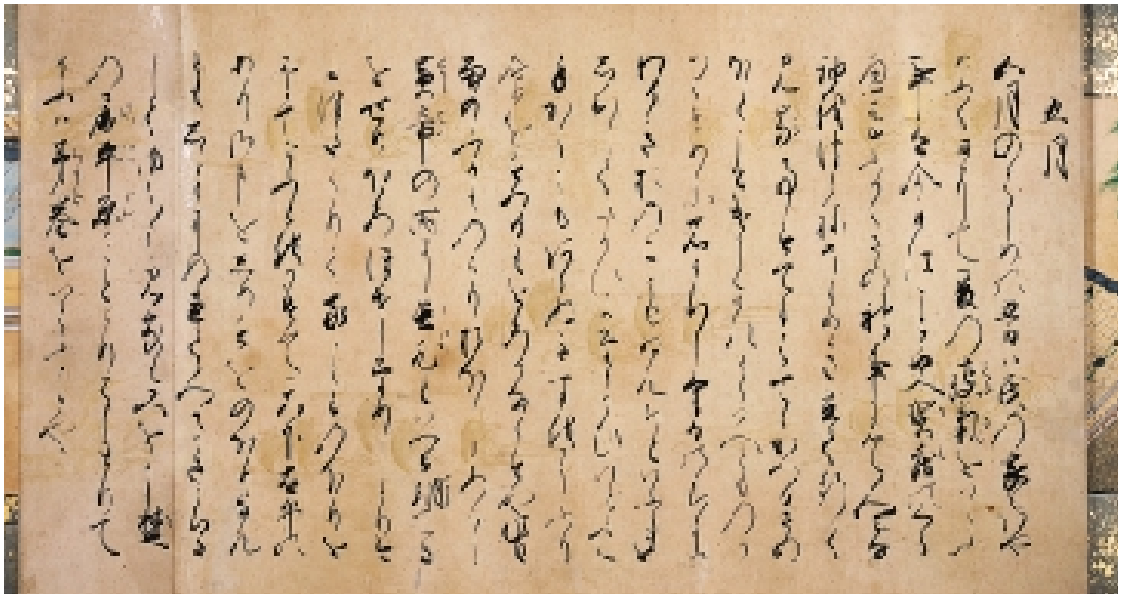
弥生の空にはさき残る花もなし
うちつゝく春雨にちりすくる
えた〳〵青葉ましりの花の色
人の心をそまよはしなやます
ものなる名ところおほき花の
にほひ吉野はつせはさら也嵯峨
野ゝ御寺には大念佛とてむかし
よりさたまれるおこなひありき
せんくんしゆしてまうてぬるに
をしつゝきて十九日はさがのゝ如
來の御身をぬくひ奉るまことに
三国第一の名佛ぞかし廿一日は高
野大師の御影供かのたか野ゝ御
山はほととをければ申すにたらす
みやこちかき東寺のさんけい仁和
寺高雄のまうてあるもけしから
ぬさま也わらはへのことわさとて
都の町々よりうへつかたまて庭
鳥あはせのなくさみあり庭鳥は
智仁勇の三徳をそなへてものゝ
ふのよきならはし也またむかしよ
りいひならはすなる千羽の庭
鳥をかふときは其家かならす
長者となるといへりそれならても
時をしるの徳あるもの也



四月

卯月に成ぬれはかきねに咲る卯
の花は又なまめかしはなたちはな
のにほひをとめて郭公の雲井に
名のるころしてのたをさの名にいに
しへ人のこひしきはけにさら也
岸のやまふききよけにさきて井
手の水に影うつるはこかね花さく
夕かとおもほゆるも心ゆかし八日
は灌佛のおこなひあり推古天王
の御時よりはしまれりほとけ
のむまれ給ふ日なれは生湯をひ
きたてまつる若葉の木すゑす
すしけにしけり行もあはれ也
おほつかなき藤の花さきみたれ
てさかふる北のふちなみもたかき
空にやにほふらん都ちかき所に
は大谷とかや名をえたる花ふさ
なかき白藤もありといへる猶も
心ゆくは野田の藤たなにそ
ありけること更藤は酒えんを
このむものなれは酒のにほひに
は花ふさもなかく木も
さかふるとなん
聞えし

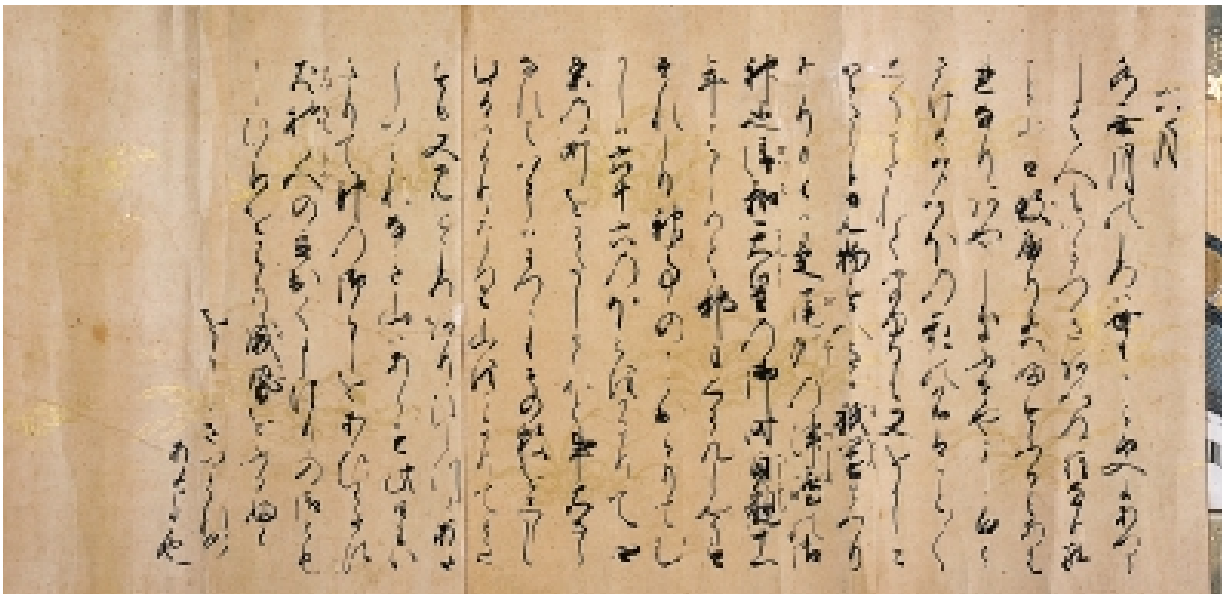
(17)頁に拡大図あり



五月

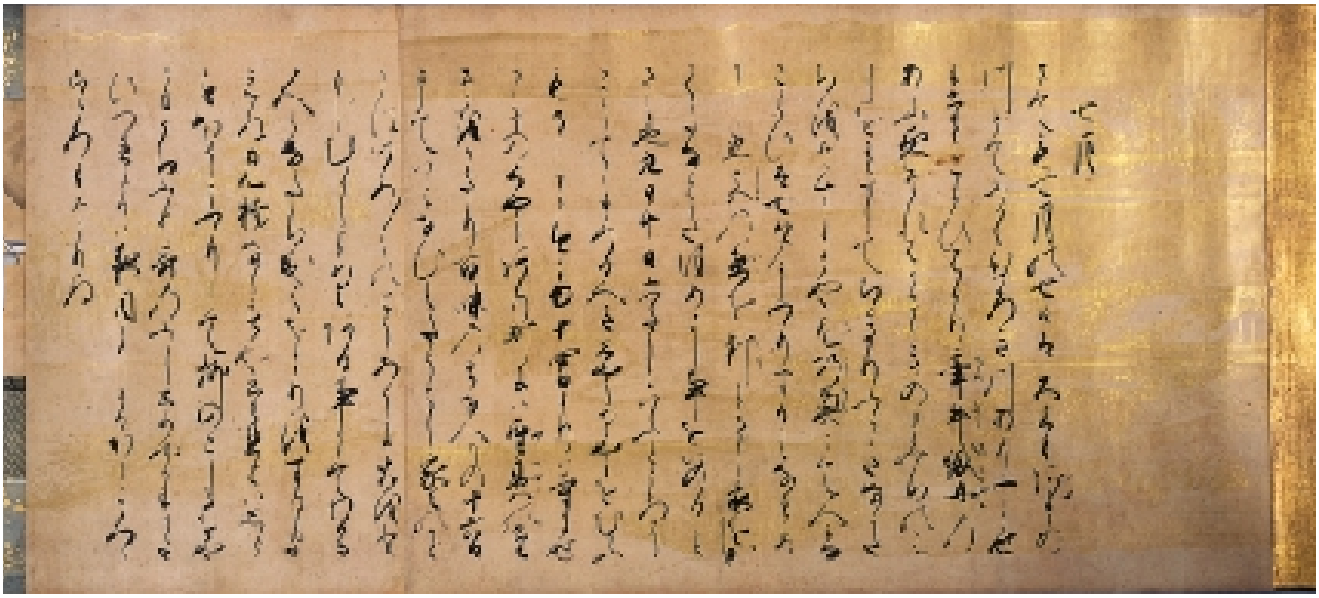
五月のはしめの五日は民の家々あや
めふく日にて夏の疫氣をはらふ
事有今日はこと更賀茂のくら
へ馬ふかくさの神事にて人みな
袖をつらねそよめき立て行て
見る事すてにはてゝかへるさの
ほとこそけうとけれわらはへとものか
りそめに石うちしけるのちには
わかきおのこともゐんちといふ事を
し出してたかひにたたかひいとみて
手からにもあらぬきすをかうふり
命をすつるもをろかならすや此日
雨のふるものこりおほしもろこし
黄帝の時に蚩尤といへる朝てき
をせめほろほせしためしより今
につたはりて家ことにのほりを
たてかふとをかけて天下太平の
ありさまをしめすをのほりなん
ともしとゝにぬれて人もかさうちさ
してゆく〳〵見るも又をかし楚
の屈平原かことよりはしまりて
けふは茅巻をいはふとかや

(17)頁に拡大図あり



六月

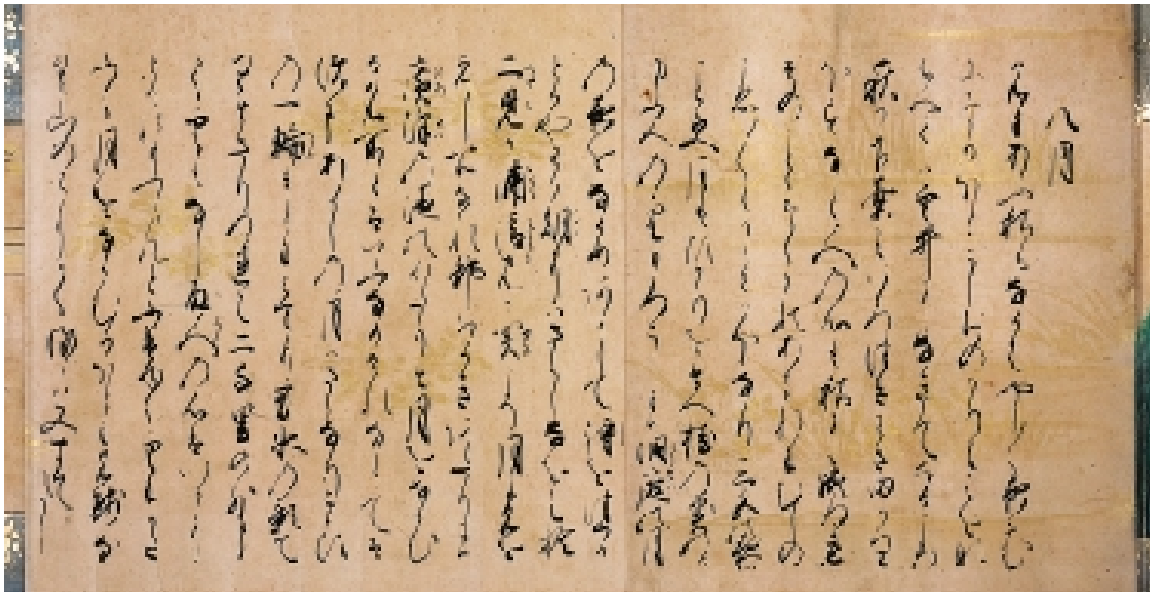
水無月のころは世もこと更にあつう
して人もいきつきあへぬ程なり家
ことには蚊やり火ふすふるもあは
れなりあやしきふせやに白く
さける夕かほの花の名はこと〳〵
しうけたれて聞ゆるも又をかしこ
とさらに見物すへきは祇園まつり
なりもとは是尾州の津嶋の御
神也清和天皇の御時貞観十一
年はしめて都にくわんしやうす
それより神事のことおこりてむ
かしは六十六のほこをかさりて四
条の町をわたしけれと事大そう
なれはいまはわつかにその数をしらし
むるはかりなり山をかさりてわた
すも又見ところありひとつもあた
にいはれなき山はあらす此日にい
たりて神の御こしをあひわたすに
犬神人の立出てまつりの御とも
しひちをはり威勢をふるふも
をかしきいはれの
ある事也



［下巻］

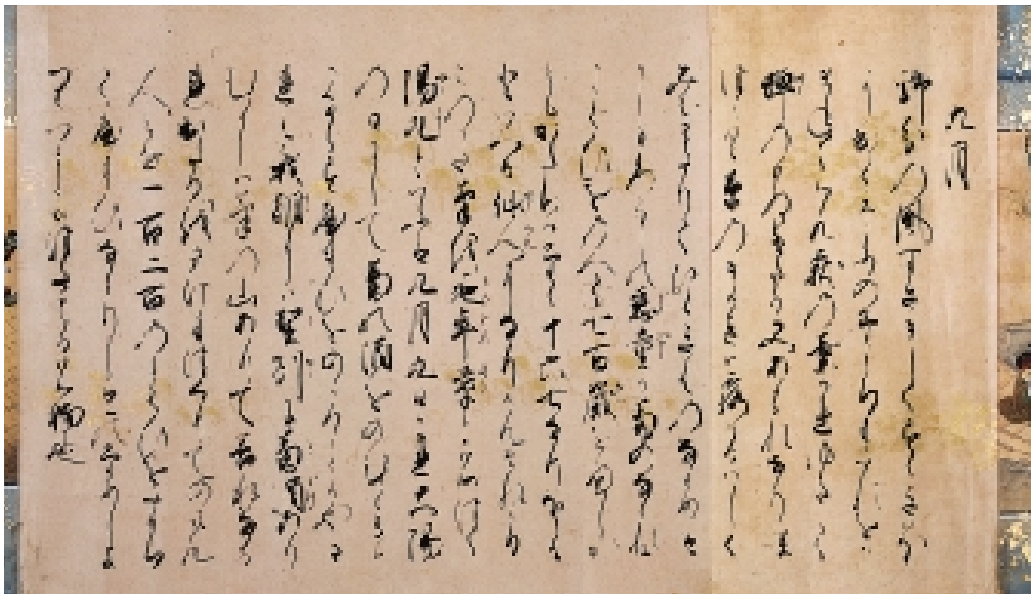
七月

さても七月の七日は天上にあまの
川とてふかくひろき川あり一とせ
にたゝこよひはかり牽牛織女の
あふ夜なれはかさゝきのもみちのは
しをわたしてちきりふかきなかた
ちをなすとかや乞巧奠とて人みな
こよひは七夕まつりするもなまめ
かし五色の糸を針にさし衣をかし
てたなはたつめに事をいのるも
さら也九日十日六たうといふところに
まうてゝまつるへきしやうりやうをむかふ
もけしからすみゆ十四日よりは寺にせ
かきのくやうあり町には聖霊のた
なをかざり百味のそなへもの十六日
までいとなむもたうとし家々のかど
にはいろ〳〵のとうろうに火をと
もしむかしよりある事にてわかき
人みなたち出てをとりをするもた
えぬ見物ならすやたれとはしら
すほうかふりして柳のこしたをや
かにうちふり哥のふししめやかにうた
ひつれたるは夜目にみるからうつゝ
こゝろになりぬ



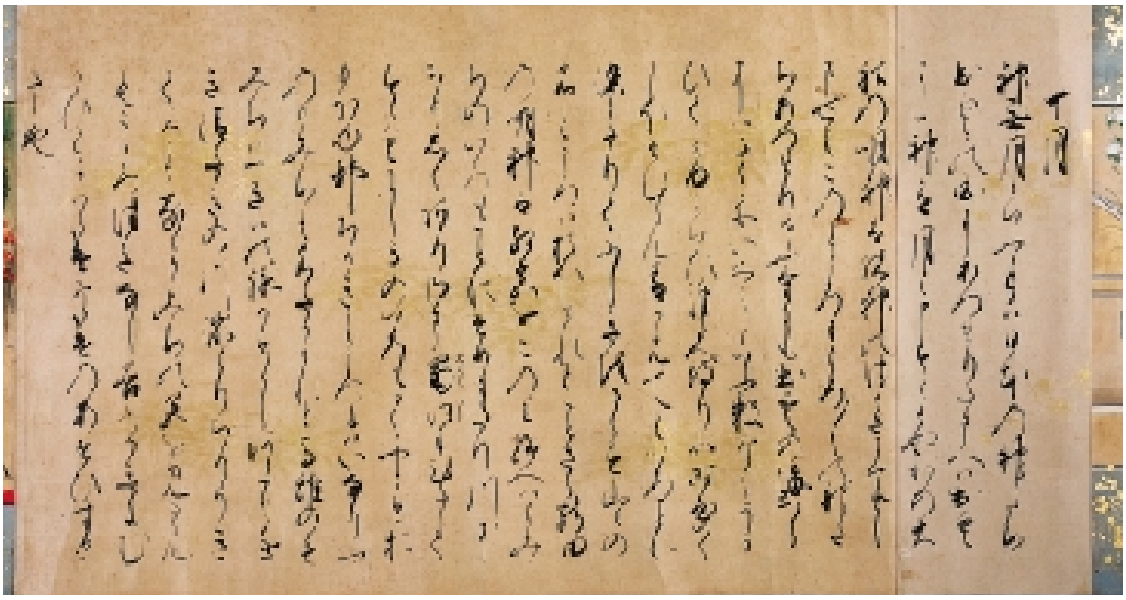
八月

名にあふ秋もなかはやう〳〵夜さむ
になるほとこしぢのかりもはをな
らへては雲井になきてくるころ
萩か下葉もいろつきわさ田かり
ほすなと人の心も秋に成ぬれは
そのことくなくものあはれにむしの
こゑ〳〵もうらみかほなり三五の夜は
こと更月もひかりをそへ桂の実のる
ゆふへの空もろこしには洞庭の月
の夜をなかめあかして詩をつくる
とかやわか朝にはさらしなをば捨
二見か浦清見か関こそ月に名を
えし所なれ都ちかきあたりには
廣澤の池のあたりそ月をなかむ
る名所とはいふなるそれならては
須まあかしの月はさらなりこよひ
の一輪まとにみてり万水の影て
りまさりぬれは二千里の外ま
て雲もなし故人の心はいかに
とかおもふらんとふけゆく空にかた
ふく月をなかむるほとに名残な
く山のはにかくるゝは又すてかたし



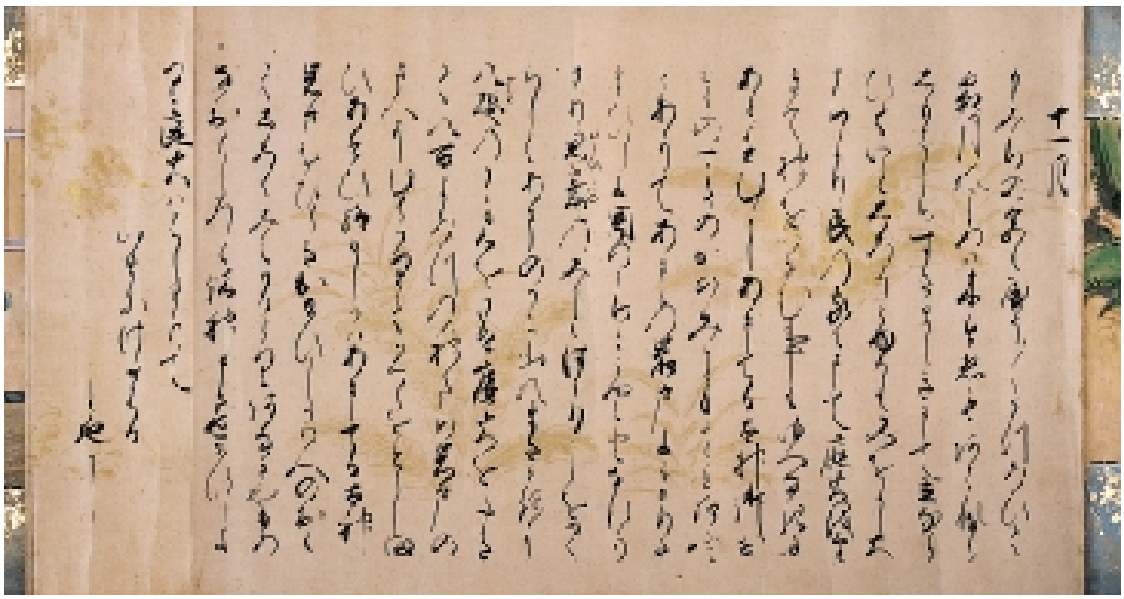
九月

野分の風すさましくすゝきはほに出てなにのたゝちにたれをかまねくらん萩の葉かれゆきて蝉のもぬけたる又あはれなり咲つゝく菊のまかきは露うるはしくみえわたりてひときはのなかめそかしもろこしの慈童か菊のなかれによはひをのへて七百歳をへしかともかたちはたゝ十六七なりほうそといへる仙人になりけんそれよりこのかた菊を延年草と名つく陽九といふは九月九日これ大陽の日にして菊の酒をのむときはかならすやまひをのかるゝとかやされは我朝には賀州に菊酒ありむかしは菊の山ありて谷水なかれ出たるをさけにつくりてのみけん人みな一百二百のよはひをたもちてやまひなかりしそのためしよりいまにつたはる名物也



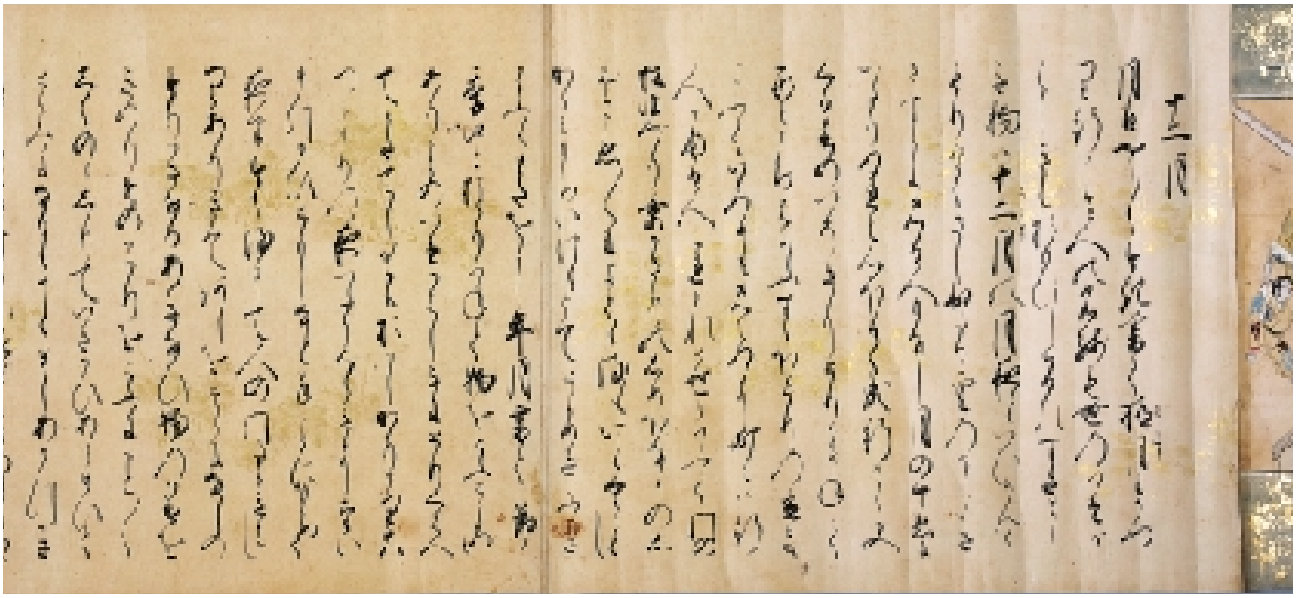
十月

神無月といふ事は日本の神たち
出雲の國にあつまりたまへは出雲
には神有月と申すとかやかの大
社の明神は諸神のつかさにてまし
ませはこのところにもろ〳〵の神た
ちあつまり給ふけにも出雲の海つら
にはさゝ舟いくらといふ数なくうか
ひてみゆといひつたへ侍り北時雨いく
しほそむらん青かえてもいろことに
染わたりてにしきをさらす山々の
名ところはおほけれとことさら龍田
の明神は紅色をこのみ給へはもみ
ちのいろもことにそめわたり川に
ちりしくありさま蜀江（しょくかう）にひたして
すゝくにしきのいろもかくやとそお
もほゆ都ちかきところにはいなり山
のもみちも名たかけれと高雄のも
みちは一きはの詠めそかしあたり近
き清たきの川瀬よりちりうき
てなかるゝもみちの色を見さらん
もこゝろつきなし谷ふかきにむ
かひてかはらけなけのあそひするも
さら也



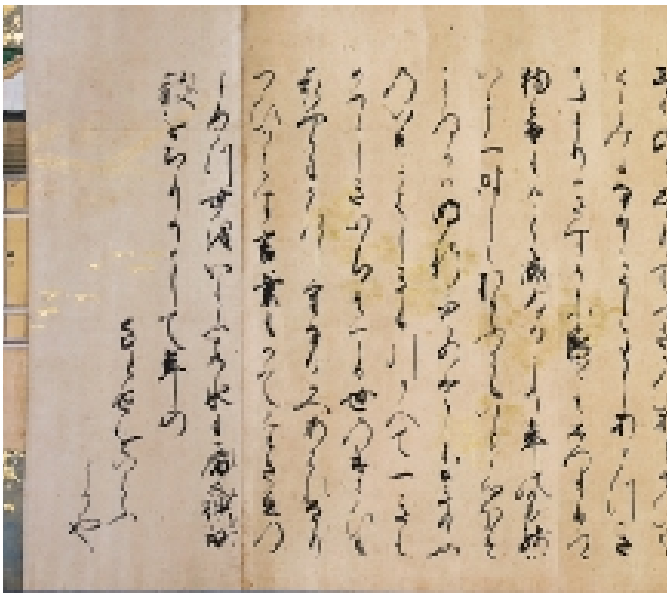
十一月

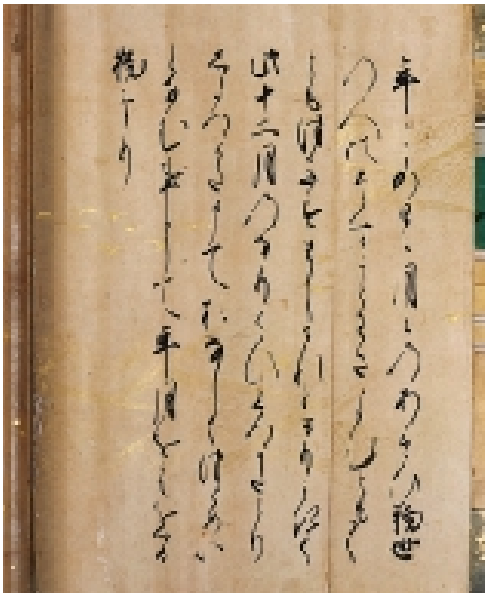
もみちの色もやう〳〵うつろひて
霜月のころは木すゑもあはれなり
しもはしらすさましきまて立なら
ひていとしろうみゆるも又をかし大
うちより民の家々まて庭火をた
きて神をいさむ事もゆへなきには
あらすむかしあまてる太神御お
とゝのすさのおのみことにうらみ給ふこ
とありてあまの岩戸にこもりた
まひしに國のうちとこやみとなれり
けり思兼（おもひかね）のみかとはかりことをめく
らしてあまのかこ山のまさかきに
八咫（やた）のかゝみをかけ庭火をたき
て八百よろつの神たち岩戸の
まへにむらかりてかくらをそうしま
ひあそひ給ひしかはあまてる太神
岩戸をひらき出給ひしかは人のおも
てしろくみえけるよりあなさやけあ
なおもしろと諸神申させ給ひしよ
り庭火ははしまりて
いまにつたはる
こと也かし



十二月

月日やう〳〵すき暮て極月にうつ
り行こそ人の名残も世のいそが
はしきもおもひしらるれすさまし
き物は十二月の月夜といひけんく
もりなくさし出たる空のけしき
さすかに見る人もなし月のすゑに
いたりぬれは心ほそく成行まゝ又
くる春のいそきにとりかさねて
家々うちはらふすゝほこりの立ま
よふていろめも見えぬに町々は行
人かへる人これかれめせといふて門の
松ゆづり葉かさりのしめほなりのし
だこゑ〳〵によはゝるもいとけうとし
かゝみもちいつゝ*とてとよめきにき
はふもまたをかし年月暮て節
季候とおとりはねて物をこふところも
ありことのいそかはしきにとりくはへ
てうたてしくもおかしかりけり大
つこもりの夜いたうくらきにたい
まつかひともしなと手ことにもちて
夜半すくるまて人の門たゝきはし
りありきてあしをそらになしつ
もりかさなるあきなひ物のかけを
きのりそのかはりをこふにこと〳〵
しくのゝしりていさかひあらそひて





とよみになるもうとましあかつき
かたよりはさすかに家々もしつまりつゝ
物音もなく成ぬるこそ年の名残は
いま一時よとおもふにもいとゝ心ほそ
からぬかは明行空のけしききのふ
のいそかはしきに引かへて一きは
めつらしき心ちそする世のけはひも
花やかにうれしけなる又あはれなり
いひかはす言葉もめてたき春の
よろつ世をいはふ若水に屠蘇白
散をちりうかして年の
千とせをいはふ
とかや

＊「く」か？

（終）

年ことの日々月々のあそひ物世
の人のなすことわさよむともかく
ともつきすましけれととりわきて
此十二月のなりはひ上つかたより
したつかたまておなしくつとめい
となむ事にて年月をはをくる
物なり

正月

五月

六月

ISSN 0388-6700

JOSHO

BUKKYO UNIVERSITY LIBRARY BULLETIN

佛教大学図書館

＜後記＞

◆当館は平成15年4月に文学部仏教学科教授池見澄隆新館長を迎えた。就任早々より学習機能と研究機能を備えた図書館の改革に奮闘いただいている新館長に巻頭言を飾っていただいた。

◆今号は巻頭言につづき、平成15年5月から開催した情報リテラシー講習会について竹村心専門員による報告、藤堂祐亨浄土宗文献室課長による『佛教大学浄土宗文献室所蔵逐次刊行物目録』の紹介、また本学図書館が今年度購入した『十二月あそひ』について古川千佳専門員による資料紹介を掲載した。

常 照 ― 佛教大学図書館報　第52号

平成16年3月1日　発行

編集・発行　佛教大学図書館

〒603-8301 京都市北区紫野北花ノ坊町96
TEL 075(491)2141
FAX 075(493)9042

http://www.bukkyo-u.ac.jp/lib/